

教材活用例(1) 「わたしが行かねば」

〔小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—藤野昌言—について〉

藤野昌言は、府中市の医師である。明治12(1879)年に全国的に流行したコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。

地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている祀堂を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



天保3年(1832年)	現在の府中市に生まれる。
嘉永4年(1851年)	父の後を継いで医者になる。19歳
明治12年(1879年)	全国的にコレラが流行する。 48歳で亡くなる。(10月) 石碑が建てられる。(11月)
明治16年	コッホによってコレラ菌が発見される。
明治30年頃	石碑が今の府中公園に移される。

藤野昌言の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、昌言の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	毎年10月6日に、藤野昌言の遺徳を偲ぶ「昌言祭」が、藤野家の子孫や関係者が集まり行われている。	昌言は、父親の死をきっかけに医者として生きていくことが、自分の目標であると心に決めた。また、医者になってからも患者に味噌や米を置いて帰ったり、熱心に勉強に励んだりした。	全国的にコレラが流行。多くの死者が出るが、原因も治療法もわからない。こういった状況の中で、医者として府中の人々の命を救うため研究を続けながら誠実に治療に当たった。 体調を崩した日も、要請に応え、患者の往診をし、自らコレラに感染し命を亡くしてしまう。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。 この慰霊祭を「昌言祭」と呼び130年以上経った今も続いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

本資料は、府中市に生まれ育った藤野昌言の生き様を取り上げている。藤野昌言は、医師になるため大阪で学んでいたが、父親が亡くなり、志半ばで地元府中市に帰り、医師として働く傍ら、漢学の勉強に励んでいた。明治12年に全国的にコレラが流行し、多くの死者が出た。当時は原因も治療の方法も分かっていなかったため大変恐れられていた。医者の中には、自分に感染することを恐れて往診を断る者もいたが、昌言はどんな条件の中でも全ての患者の命を救うため治療にかけ回った。ついには、昌言もコレラに感染してしまい一生を終えるという実話である。体調がすぐれない中でも病人を助けようと往診に向かう昌言の生き様から、医者として正しいと信じる道を行動に移す強い意志とそれを貫き通すことの大切さを伝える資料である。また、先人の努力や精神が現在も受け継がれていることにも気付くことができると考える。

★【心に響くちょっといいはなし】

明治12年頃、人力車を引いていた若者がいた。彼は、毎日昌言からお呼びがかかり、昌言を乗せて往診に行くことを誇りに思っていた。人力車を引いていると、昌言が往診に行く場所は、どうも治療費が払えないような患者のところばかりなので、不思議に思い、

「藤野先生、どうして治療費が払えないような家ばかり往診に行かれるのですか。」と尋ねた。すると、昌言は、

「ありゃあのお、お金のある者は、ちょっと不安なことがあったら、すぐ相談に来る。治療費が払えん者は、ぎりぎりまでがまんして、もうどうにもならんようになって私のところに来る。だから、私が行かなければならんのは、命がどうにもならん治療費が払えん人の家なんじゃ。」

と話をされたそうだ。

これは、若者の甥にあたる方が話されていた実話である。

ウ 資料全文

「わたしが行かねば」



府中市の府中公園にあるお堂では、毎年10月6日に、たくさんの方が集まります。

今から180年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町ふじのしょうげんに藤野昌言が生まれました。

昌言は、てんぽう天保13（1832）年、医者ふじのしょうげんの家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

19歳のある日、「父危篤きとく」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、

お父さんはもう亡くなっていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。

昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ。」と言われるようになりました。昌言は、家での診察しんさつだけではなく、往診おうしんにも出かけました。そして、治療費ちりょうひが払えない患者には、

「これも薬のうち。」
と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治12（1879）年夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったので、十分な治療ができませんでした。うつた人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けました。

昌言は、^{おうしん}往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、^{しんさつ}診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても^{しんさつ}診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は、

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんがかけ込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは・・・。」

「お願いでございます。二人の命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、言いました。昌言は、家族が必死に止めるのも聞かず、ふらつく足で立ち上がり、

「^{おうしん}往診いたしましょう。」

と、答えました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は、涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて^{おうしん}往診に出かけました。^{しんさつ}診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに^{かんせん}感染していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちを込め^{せきひ}石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭」と呼ばれ、130年以上経った今も続いています。

【参考文献】

藤野守一（著）「医師 藤野昌言」

本山町郷土史会（編）（1986）「もとやま2号」「もとやま4号」 本山町 本山町郷土史会

村上正名（著）（1981）「府中散策」 佐々木印刷出版

エ 授業展開例 -学習指導案(略案)-

昌言の人間的な弱みや葛藤と行動との対比を中心にした展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

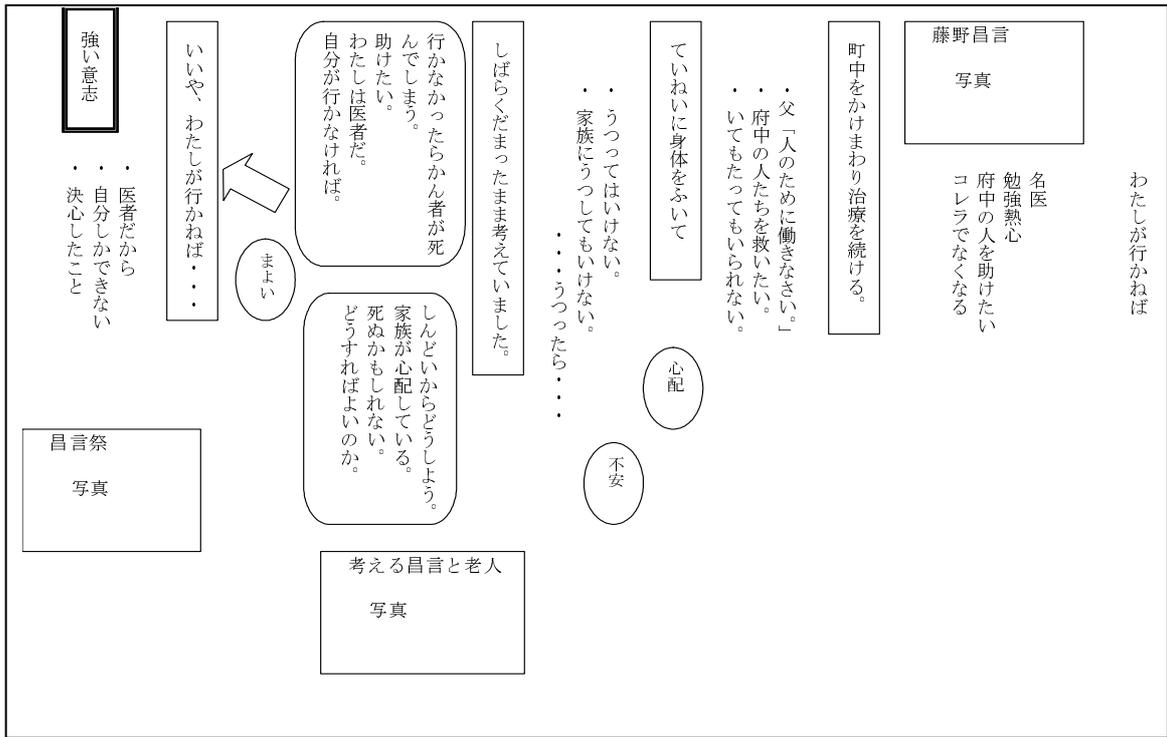
- (ア) 主題名 強い意志 1-(2)
 (イ) ねらい 家族に涙ながらに押しとどめられ、しばらくだまってきたまま考えている昌言の気持ちを考えることを通して、自分でやろうと決めたことはあきらめずに取り組み、粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培う。
 (ウ) 資料名 「わたしが行かねば」
 (エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 藤野昌言について想起する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 藤野昌言は、どんな人だったか。 ○ 昌言祭の映像を見よう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会科の学習や、社会見学と関連付けて、想起させる。 ○ 今も引き継がれていることを知り、資料への興味付けをする。
展開	2 資料を読んで考える。 3 自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 町中をかけ回り治療を続ける昌言は、どんなことを思っていただろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・父の言葉を忘れずに働こう。 ・府中の人たちを病から救いたい。 ・いてもたってもいられない。 ○ 昌言は、往診から帰って体をふいている時どんな気持ちだったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分がうつつたら診察できない。うつるわけにはいかない。 ・家族にうつしてはいけない。 ・うつつたらどうなるのだろう。 ◎ 家族に涙ながらに押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・今日はしんどいからどうしよう。 ・家族に心配をかけている。 ・行かなかったら患者さんが死んでしまう。 ・自分が行かなければ誰も行く人がいない。 ○ なぜそこまでして昌言は、行ったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・医者だから。 ・自分しかできないから。 ・自分でやろうと決心したことだから。 ○ 自分で決めて一生懸命がんばっていることは、どんなことだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 往診＝感染という恐怖がある中での昌言の行為であることに気付かせる。 ○ 「不安や心配なことはないだろうか。」と切り返し発問で弱さに共感させる。 ○ 昌言の気持ちをワークシートに書いて自分の考えをはっきりさせる。 ○ 「どうして医者だったら助けなければならないのか。」と切り返し発問をして昌言の気持ちに迫らせる。 ☆ 医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせ、自ら考えを深めさせることができたか。 ○ 医者としてのやりがいや強い意思が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。 ○ 与えられたものではなく自分で決めてがんばっていることを振り返らせる。
終末	4 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 藤野昌言へ手紙を書こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昌言と自分を重ねて見つめさせる。

(才) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情	児童の意識の流れ
	中心人物 (藤野昌言)	その他の人物		
<p>○府中公園</p> <p>○医者になった藤野昌言</p>	<p>・医者になるための勉強 ・父危篤、亡くなる。 ・父の言葉が忘れられず迷わず医者になる。 ・人々を病から救いたい。 ・治療費が払えない患者の往診に出かける。</p>	<p>十月六日にたくさんの人々が集まる。</p> <p>父の言葉 「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」</p>	<p>・お父さんの後をついで、医者になろう。 ・府中市の人たちを病から救いたい。 ・お金がないなら、米やみそを置こう。</p>	<p>○医者になってからも熱心に勉強を続けるなんてすごい。 ○治療費が払えない患者も診察している。</p>
<p>○明治十二年夏 コレラが全国的に流行</p>	<p>・毎晩毎晩、医学の本を読んで薬の調合をくり返す。 ・昼も夜も食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けた。 ・往診から帰ると、家の外で着物を脱ぎ、ていねいに身体をふいてから家に入る。</p>	<p>府中の人々 ・コレラにうつり、コロコロとなくなる。</p>	<p>・どうしたら病気を治すことができるのだろう。 ・府中の人々を助けたい。 ・コレラにかかってはいけない。 ・家族にうつしてもいけない。</p>	<p>○食べることも寝ることも忘れて治療を続ける。 ○昌言や家族にうつったら大変なことになる。</p>
<p>○二カ月後の秋</p>	<p>・体がだるく、どうしても診察室に足が向かない。 ・ふらつく足で立ちあがり「往診いたしましょう。」 ・しばらくだまったまま考える。 「いや、わたしが行かねば。」家族を振り向きうなずいて往診に出かける。</p>	<p>家族 ・今日は、休んでくださいとたのむ。 おじいさん 「二人の生命をお助けください。」 家族 「どうか今日だけは、お休みください。」と必死で止める。 「あなたが倒れてしまいます。」と涙ながらに押しとどめる。</p>	<p>・もうすぐ患者が来るのに体がだるい。 ・二人を助けるために、往診しよう。</p>	<p>○大丈夫だろうか。 ○昌言も疲れ果てているのにどうするのだろう。 ○家族も心配している。</p>
<p>○昌言祭</p>	<p>・その場に倒れる。 ・コレラに感染 ・高熱に苦しみながらも患者を心配する ・息を引き取る。四十七歳</p>	<p>おじいさん 「これで助かります。ありがとうございます。」</p> <p>感謝の気持ちを込めて、石碑を立てる。</p>	<p>・私が行かなければ誰も行く人はいない。医者だから行かなくては大変なことになるところだった。 ・自分が死んだら患者たちはどうなるのだろう。</p>	<p>○こんな状態でも昌言は行くのか。 ○医者になって人のために働こうと決めたことを最後まで貫いている。</p>

(カ) 板書例



【板書の構成】

ポイントになる言葉を短冊で用意したり、昌言の思いがよく分かるように、言葉を整理したりして板書する。特に、中心発問については、行こうかどうしようかと迷っている気持ちを上段と下段に分けて整理し、揺れている気持ちを視覚的にはっきりさせる。その上で、行かなくてはこの思いに至る価値の高まりが分かるように工夫する。そして、「いいや、わたしが行かねば。」と決心した思いにつなげる。

(キ) ワークシート

わたしが行かねば

年 組 ()

☆ 家族に押しつけられた言葉を、じっと
ためたお母さんなじみを変えてくれたため。



A large, rounded rectangular area with a dashed line border, intended for writing. It contains ten horizontal dashed lines for writing practice.

(2) 活用のポイント

昌言は、医者になろうと決心したことを最後まで貫き通している。自分の体は省みず、府中の人々を救いたいという思いで診察を続けている。強い意志をもって診察に当たる昌言の立場に立って、その思いを考えさせることで、自分で決めたことを粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培うことができると考える。

そのために、昌言の心情に焦点を当てた発問をする。まず、けんめいに診察する昌言の気持ちを問うが、そこで、自分も感染する心配があった中での行動であったことに気付かせる。それは、往診から帰って体をふく行為からも考えさせられる。中心場面では、いったんは「往診いたしましょう。」と答えただものの家族に涙ながらに押しとどめられて葛藤する昌言の気持ちを考えさせたい。

そこで、中心発問では児童に自らじっくりと考えを深めさせるために、書く活動を取り入れる。そして、思いを交流する中で、「いや、わたしが行かねば・・・」と言う昌言の言葉につなげることで、迷った末に医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせる。その際、「なぜそこまでして行ったのだろうか。」と考えさせることで、医者としてのやりがいや強い意志が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。終末では、昌言の手紙という形で昌言の生き方と自分を重ねて見つめさせる。

自分たちが知らない時代の資料にスムーズに入るためには、場面絵を活用するなど資料提示にも工夫が必要である。昌言祭は、地元の人々に受け継がれ、今も続いている。昌言の強い意志が、130年以上経った今でも引き継がれていることを感じさせてくれる。

ア 発問の工夫

昌言の行動の底にある心情に焦点を当てた発問にする。中心場面では、家族に涙ながらに押しとどめられて迷う昌言の気持ちを考えさせる。

イ 書く活動を生かして

- ・中心発問では、昌言の心の葛藤をじっくり考えさせるためにワークシートに自分の考えを書かせる。

- ・終末の昌言への手紙は、自分で決めたことで、あきらめずに粘り強く取り組んでいることを書かせる。

ウ 資料提示の工夫

- ・導入では、学習したことと関連させて、藤野昌言の功績や社会状況について想起させる。
- ・資料をより身近に感じさせるために、実際に行われている昌言祭の様子を映像で見せる。

(3) 授業の実際—児童の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開では、まず町中を駆け回り治療を続ける昌言の思いを考えさせた。児童は、医者になろうと決心した思いを忘れず、府中の人を助けたいと治療を続けている昌言の思いをとらえることができていた。

そして、往診から帰って体をふいている昌言の思いを考えさせた。「不安や心配はないだろうか。」と補助発問を考えていたが、もし自分にうつつたらどうなるのだろうかという不安や心配な気持ちは、児童の発言の中から出てきた。

中心場面では、「家族に押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。」と発問した。いったんは往診しようと思ったものの、家族に押しとどめられて葛藤する状況を考えさせるために、書く活動を取り入れた。交流する時に、「医者だから行く。」という考えに、「どうして医者だったら行かないといけないのか。」と切り返すと、「自分で行って助けたい。」「自分が決めたことだから。」と強い決心、意志があったことを考えることができた。また、「自分だったら怖くていけないかも。」と、人間としての弱さに気付く発言が出ることで、昌言の意志の強さをより深く考えることができた。

イ 書く活動を生かして

中心場面では、「どうしたらよいのだろうか。」と迷う気持ちや、「自分がコレラにかかったらどうなるのだろうか。」という不安な気持ちが出てきた。しかし、ほとんどの児童が、「患者を助けたい。」「わたしが行かないと死んでしまう。」「医者だから行こう。」と考えた。家族に引き止めら

れて迷いはあったが、自分が決めた医者として成すべきことを貫き通そうとする昌言の思いに迫ることができた。

終末では、自分を振り返り、自分で決めてがんばっていることを昌言への手紙という形に表した。

- ・昌言さんは、いやだと思う時はありませんか。わたしは、時々もういやという時があります。でも、わたしが決めたので、もっとがんばろうと思います。
- ・昌言さんと同じように、自分が出ると決めたピアノのコンクールでうかるようにがんばります。
- ・昌言さんの強い意志で勇気もてました。わたしも、ゆめをもってがんばっていきたいです。このように、昌言の生き方と自分の努力を重ねてとらえることができた。

ウ 資料提示の工夫

昌言の生い立ちや、時代背景などは、事前に学習したことを想起する事で、資料の世界にスムーズに入ることができた。

また、導入で昌言祭の実際の映像を見たことは、児童の興味を引き付け、資料への関心を高めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

○ 社会科

事前に「わたしたちの府中市」という副読本を活用して『コレラとたたかった藤野昌言』を学習する。昌言の生い立ちや時代背景について知ることができる。

○ 特別活動（社会見学）

府中公園そばに藤野神社や石碑が建てられている。日常的に訪れる機会はありませんので、社会見学などの機会を利用して現地を訪れ、自分の目で確かめると資料がより効果的である。

○ 特別活動（発表会等）

学習した内容を、発表会等の機会を利用して劇化する事も考えられる。他の学年や地域の人々へ広める場にもなる。

(5) 心のノートを活用

○ 終末で、「心のノート」P.17を活用する。

「目標をもってチャレンジしよう」に自分の目標を記入し、やり遂げようという実践意欲を高める。

○ 事後指導で、「心のノート」PP.18-19を活用する。

自分が決めた目標を続ける秘訣を聞いて生かそうとする気持ちをもたせ、目標達成時に色をぬることにより、継続へのさらなる意欲を育てる。

